

銀気無之候銅

社団法人日本銅センター会長
(住友金属鉱山株式会社 取締役社長)

福島 孝一



日本は安土桃山時代から江戸時代にかけて世界有数の銅産出国であった。生産された銅は主として海外貿易の決済手段に用いられた。しかし、十六世紀末までは粗銅に含まれる銀分を取り除く技術がなかったため、銀が含まれたままの銅が流出し国益を大きく損なっていた。

一五九一年京都寺町松原下ル西側で銅吹き(銅製錬)と銅細工の店を始めた蘇我理右衛門は、南蛮人から鉛を使った銀銅吹分け(分離)の原理を聞かされ、苦心の末、「南蛮吹き」という新技術を完成させた。理右衛門はこの秘伝の技術を大阪で広く同業者に伝授した。これにより日本は銀の無益な海外流出を食い止めることができたのである。

蘇我理右衛門は住友家初代政友の姉と結婚し、さらにその子友以が娘婿として住友家に入ったことで、銅吹業は住友家の家業となった。このように当社事業のルーツは四年以上前の南蛮吹きにまで遡る。

さて、理右衛門が銅吹きを始めてから約三十七年後の一九六二年、当社の元社長藤森正路が技術調査のために英国ウェールズのスワンジー市に滞在していたときのことである。同市は、古い冶金製錬の歴史を持つ街として有名だ。偶々同市の金属博物館を訪問すると、陳列物のひとつに力強い毛筆で「銀気無之候銅(銀気無之候銅)」と記された荒銅(銅を含まない荒銅)の銅が目に止まった。これこそ、南蛮吹き技術で吹き分けられた荒銅だったのである。後日藤森が再度同博物館を訪れたところ、案内された倉庫にはこの荒銅のみならず江戸時代輸出用に精製された棹銅などの標本、溶解に用いたるろばなど関連資料約八点が整然と並んでいたという。日本でも非常に少ないこれらの貴重な資料を取り戻すことができないか。再三交渉を行った結果、一九八六年同博物館の好意によりその資料の約半分が日本金属学会の金属博物館(仙台市青葉山)に永久貸与という形で里帰りした。

当社関係者と遠い異国の地での南蛮吹きとの出会いに、因縁めいた不思議なものを感じるのは私だけではないだろう。それは技術の源の再発見だ。この荒銅を見るたびに、我々の今の採鉱や製錬技術が先人達の苦闘の上にあることを思い知らされるのである。



銀気無之荒銅(銅を含まない荒銅)



南蛮吹きの様子(鼓銅図録より)

銅

目次

- 2 カパーロマン
銀気無之候銅
福島孝一
- 3 銅の歴史物語
時代を越えてハイテクをカタチにする銅
兵庫県・荒田神社
- 4 ルポルタージュ
歴史の町・伊勢に異彩を放つ
地域全体を蘇えらせた「おかげ横丁」
リレー随想
- 6 「日本画」絵具と材料について
「お湯」をつくる銅のちから
給湯器用熱交換器
- 8 カパーロマン
はうとする鮮やかさ
緑青ブルーの店舗演出
- 10 カパーワールド
院内感染防止に向けた新たな挑戦
医療施設において銅の抗菌性を検証中
- 11 Cu Focus
極上の二杯を演出する華やかな銅の輝き
キリンシティ田町店
- 12 銅の需給動向
- 13 銅センターニュース
- 14 トピックス
- 15